



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	同定可能性に基づく英語の冠詞の指導
Author(s)	西, 恵里奈; 安田, 亮; 山田, 耕平 他
Citation	教授学の探究, 27, 41-70
Issue Date	2010-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42792
Type	departmental bulletin paper
File Information	kyouju27_004.pdf



同定可能性に基づく英語の冠詞の指導

西 恵里奈（3年）、安田 亮（3年）、山田 耕平（3年）
千廣 峻史（4年）、細川 智央（4年）、堀井 奈々（4年）

（北海道大学教育学部教育方法学研究室）

目 次

- 0. はじめに
- 1. 先行研究の教育内容構成の検討
- 2. 教育内容構成
 - 2. 1. 定 (definite) /不定 (indefinite) の区別——同定可能性 (identifiability)
 - 2. 2. 唯一性 (uniqueness) ゆえの同定可能性 (identifiability)
 - 2. 3. some とゼロ冠詞の区別
 - 2. 4. 教育内容の構造
- 3. 授業プラン「Yes! We 冠詞!」とその解説
 - 3. 1. 名詞が単数形の場合
 - 3. 2. 名詞が複数形の場合
- 4. 「Yes! We 冠詞!」の授業実践
 - 4. 1. 授業実践記録とその分析
 - 4. 2. 授業プランの改訂点

参考文献

授業プラン

0. はじめに

北海道大学の教育学部では、毎年6月に、高校生を対象とした1日体験入学を実施している。2009年度の1日体験入学の場で、教育方法学研究室に所属する3・4年生は、参加した高校生たちに対して60分の授業を実施した。このとき用いたのは、筆者たちが作成した「Yes! We 冠詞!」という授業プランである。

日本の英語教育における冠詞の教え方は、aは「ひとつの」、theは「その」というように、各冠詞に意味をつけて提示するという方法に甘んじている。このことは、もともと日本の英語教育が論理的系統的指導より言語活動による指導を重視していることが主な要因であると考えられる。町田（2000）は、「言語が体系性をもつ以上、外国語としてその言語を学習する際にも、論理的系統的な指導が行われなければ獲得できない側面がある」¹という立場から、言語

1 町田（2000：1）

活動一辺倒の英語教育に反対して、冠詞を体系的に教える授業プランを作った。

筆者たちは、冠詞体系の指導について町田 (2000) の立場に賛同した上で、町田 (2000) の授業プランをよりよくするために教育内容構成から検討しなおし、「Yes! We 冠詞!」を作成した。しかし、そのときの「Yes! We 冠詞!」は、町田 (2000) の教育内容構成に大きくよるものであった。そこで筆者たちは、町田 (2000) が提示した教育内容構成とは一線を画する教育内容を構成し、改訂版の「Yes! We 冠詞!」を作成したのである。

本稿では、先行研究にあたる町田 (2000) の教育内容構成を検討したうえで、改訂版「Yes! We 冠詞!」の教育内容構成と授業プランを提示する。そして、実際に倶知安農業高等学校で実践した際の記録を基に、さらなる改訂点を提示する。

1. 先行研究の教育内容構成の検討

町田は冠詞について、「いくつかの基本的な概念と規則によって体系立てられた構造を持つ、文法体系の下位体系である」² という認識に立っている。そして、冠詞体系がどのような要素によって構成されるのか、要素同士がどのように関係づけられているのかを明らかにすることで、冠詞体系の構造を記述する最も適切な理論に基づき、教育内容について考察した。その結果、冠詞として、ゼロ冠詞、強勢のない *some*, *a*, *the*, *null* 冠詞の 5 つを認め、LOCATABLE³ (指示対象、共有集合)、INCLUSIVE (包括性)、LIMITED EXTENSIVITY (名詞句の指示作用の及ぶ範囲に制限があるかどうか)、COUNT (指示対象が *count* か *mass* か)⁴ という 4 つの素性から分析している。次の表 1 は、その分析をまとめたマトリックスである。ある冠詞がその素性の表す特徴を持つ場合は +、持たない場合は -、その素性に関して中立的 (どちらの値もとりのう、またはどちらとも言えない) である場合は ± で表されている。なお、ゼロ冠詞と *some* がとる COUNT の値は、名詞が単数形か複数形かによって異なり、単数形の場合 -、複数形の場合 + となるので、表の上では ± となっている。

この分析は、Hawkins (1978, 1991) や Chesterman (1991) が組み立てた体系に、町田 (1997) が COUNT による対立を加えたことによって成り立っている。そこで、彼らの理論にしたがって、それぞれの素性がもつ特性について、それぞれの冠詞がどのような値をとるのか、町田 (2000) の例文を使って述べることにしよう。

2 町田 (2000 : 2)

3 文中の英語表記で、大文字表記 (LOCATABLE など) は素性を表し、小文字表記 (*locatability* など) は概念を表す。斜体表記 (*the machine* など) は例文の中で注目してほしい語句を表す。

4 町田 (1997) は *count* と *mass* の区別について言及している。それによると、*count* とは他の個体と区別する境界をもつ存在物が「離散的個体であること」である。例えば *an apple* は恣意的でない境界を持ち他の *an apple* とは区別され、*an idea* は他の *an idea* とは区別される境界を持っている。*an apple* も *an idea* も離散的個体である。よって、*an apple* や *an idea* は *count* である。一方 *mass* とは、恣意的な境界を持たない存在物、または境界が恣意的でない存在物が「未分化で連続していること」である。例えば *enough water* は恣意的な境界を持たず、*some butter* は境界が恣意的でない・どちらも未分化で連続している。よって、*enough water* や *some butter* は *mass* である。

	LOCATABLE	INCLUSIVE	LIMITED EXTENSIVITY	COUNT
zero	—	±	—	±
some	±	±	+	±
a	±	±	+	+
the	+	+	+	±
null	+	+	—	+

表 1. 冠詞の素性分析 (町田 2000: 44)

LOCATABLE と INCLUSIVE

Hawkins (1978) は the の指示の本性を、包括性 (inclusiveness) と、冠詞が生起する名詞句の指示対象が共有集合⁵に見出すことができること (locatability, 発見可能性) という 2つの概念によって説明した。包括性とは、ある文脈において the を含む名詞句の記述を満足する存在物の総体 (totality) を指示することである。この概念によってそれぞれの発話ごとの場面や文脈から構築される集合を総体的に示すことができる。

- (1) a. Bring *the wickets* in after the game of cricket.
 b. I must ask you to move *the sand* from my gateway.

例えば、(1a)の *the wickets* はクリケットのゲームで使われたすべてのウィケット (クリケットの用具) を指示し、(1b)の *the sand* は出入り口にある砂の総体を指示する。

また、発見可能性に関して Hawkins (1978) は、聞き手と話し手が共有する共有集合が何によって組織されるのかについて、5つに分類している。

- (2) a. Bill was working at a lathe the other day. All of a sudden *the machine* stopped turning.
 b. Pass me *the bucket*, please.
 c. The man drove past our house in a car. *The exhaust fumes* were terrible.
 d. *The woman he went out with last night* was nasty to him.
 e. *The Prime Minister* is going to resign.

(2a)は先行文脈、(2b)は直接的場面 (聞き手と話し手が会話している物理的場所の中に指示対象の存在を確認できる場合)、(2c)は先行文脈からの連想物、(2d)は説明的修飾語を伴う名詞句から、共有集合が組織されている。また、(2e)は発話の広範な場面 (聞き手の背景知識など、直接的場面以外のすべての場面) から共有集合が組織される例である。これらの発見可能性の概念によって、包括性で示された集合を絶対的な概念とすることができる。

つまり Hawkins は、包括性と発見可能性という概念があるからして、聞き手は the によって指示対象がどれかわかるのだと示したのである。よって the は +INCLUSIVE, +LOCA-

5 「話し手と聞き手が共有する知識や発話の状況によって組織される存在物の集合」 (町田 2000: 26)

TABLE となる。

一方, *a* や *some* といった不定の冠詞について, Hawkins (1978) は, *a* や *some* の指示対象が共有集合に存在するか否かについては中立的であり, 言及されていないのだと主張している。よって *a* や *some* は発見可能性に関して中立ということになる。

- (3) *Some students* were standing outside the gate. Bill kept his eye on them. After a little while *a student* came up to him and asked him his name.

たとえば, (3)における *a student* は, 先行文脈によって組織された話し手と聞き手の共有集合である *some students* の中に存在するという解釈と, 先行文脈の *some students* とは異なる別の *student* であるという解釈の両方が許される。

また, Hawkins (1991) は, *a* や *some* について, 意味論的には包括性について中立であるが, 実際には発話ごとの場面や文脈から包括性が判断されるとしている。

- (4) a. I saw *a professor* yesterday.
b. I didn't buy the house because *a window* was broken.
c. *A movie* that Mary was watching last night was really interesting.

(4)の場合, それぞれ *a professor*, *a window*, *a movie* それ自体は唯一性⁶ について中立だが, 非唯一的な解釈も許している。

これらを総括して, *a* や *some* は \pm LOCATABLE, \pm INCLUSIVE とされる。

Chesterman (1991) は, *the*, *a*, *some* だけでなく, 単数固有名および単数可算名詞と生起する null 冠詞と, 複数名詞および *mass* の名詞と生起するゼロ冠詞を体系に組み込んでいる。

null 冠詞は, 聞き手と話し手の両方がどのことであるかを知っているはずの固有名, つまり固有名詞と生起するので, その名詞句の指示対象は聞き手と話し手の共有集合の中にあるといえる。よって null 冠詞は発見可能性を有し, +LOCATABLE といえる。また固有名の場合は当然 +INCLUSIVE であり, そうでない場合も, 抽象的な制度などを包括的に指示しているため, +INCLUSIVE となる。

ゼロ冠詞は, 単に単数固有名および単数可算名詞であればどんな名詞句とも生起するわけではなく, +LOCATABLE の性質をもった名詞句でないと生起できない。

- (5) Fred lost *millions* in the war.
(6) Fred lost *fingers* in the war.

例として, (5)の文が成立するのに対して, ゼロ冠詞と生起しているはずの *fingers* を含んだ

6 町田 (2000) は, ここでの唯一性という概念について, Hawkins (1991) に依拠している。それによると, 唯一性とは, 「発話ごとの場面や文脈から構築される集合内での存在物の唯一最大の集合」または「発話ごとの場面や文脈から構築される集合内での唯一最大の *mass* の量」という概念である。

(6)が成立しない理由を考える。*fingers*のように身体の一部を表す名詞句があるならば、ふつうそれは誰かの身体の一部であることが想定される。よって、(6)の場合は主語であるFredの指(Fredから連想される共有集合内に存在する指)と解釈される。つまり、文中の*fingers*に相当する位置には、+LOCATABLEの性質をもった名詞句がくるはずである。そのことは、たとえば(6)の*fingers*と生起するゼロ冠詞の位置に、

(7) Fred lost *a finger*/*some fingers* in the war.

というように、+LOCATABLEである*a*や*some*を入れると文が成立することからもわかる。つまり、ゼロ冠詞と生起している*fingers*が(6)において生起できないということは、ゼロ冠詞それ自体が-LOCATABLEということになる。

またゼロ冠詞が包括性を有するか否かは文脈によって決まるので、±INCLUSIVEとなる。

LIMITED EXTENSIVITY

LIMITED EXTENSIVITY(名詞句の指示作用の及ぶ範囲に制限があるかどうか)という素性は、*the*, *a*, *some*とゼロ冠詞の対立に見出すことができる。*the*, *a*, *some*と生起する名詞句は、指示作用の及んでいる範囲に制限が加わる。

- (8) a. We baked *a cake* for his birthday.
 b. I had *some cake* for dessert.
 c. Where is *the cake*?

(8)の場合、それぞれ*a cake*, *some cake*, *the cake*によってケーキの数量や具体例が示されている。

一方、ゼロ冠詞は生起する名詞句が指示する範囲に制限が加わらず、名詞句が意味するクラス、類、カテゴリーといったものの全体を指示することができる。

- (9) a. I like *cake*.
 b. *Cake* is made from flour, sugar and eggs.

(9)の場合、どちらも*cake*の指示作用の及ぶ範囲に制限がないので、ケーキというクラス、類、カテゴリーといったものの全体を示すことができる。

よって*the*, *a*, *some*は+LIMITED EXTENSIVITYとなり、ゼロ冠詞は-LIMITED EXTENSIVITYとなる。

また、Chesterman (1991)はnull冠詞について、固有名は人、もの、事柄の名前であるため、固有名が示す指示作用の及ぶ範囲は常に最大であるといえるので、ゼロ冠詞と同様に-LIMITED EXTENSIVITYとした。

COUNT

COUNTは町田(1997)が冠詞体系の教育内容に導入することを提案した素性であり、

これは指示対象が count か mass かを示している。まず a, some, ゼロ冠詞がそれぞれ単数形の名詞と生起している(10)の例文を見てみよう。

- (10) a. I used to have a *lamb*.
 b. I had some *lamb* for dinner.
 c. I prefer *lamb* to beef.

(10a)は冠詞の a と count としての *lamb* が生起して、「動物としての子羊」の個体だと解釈される。よって a は+COUNT となる。

some とゼロ冠詞の場合、複数形の名詞と生起している場合のみ+COUNT となるのだが、(10b)と(10c)はそれぞれ some とゼロ冠詞が mass としての *lamb* と生起して、「子羊の肉」と解釈される。このことから、some とゼロ冠詞は単数形の名詞と生起するとき-COUNT となる。これらを総合して some とゼロ冠詞は±COUNT となる。

the は count か mass かということに関して全く中立的なので±COUNT となる。

null 冠詞は、固有名と呼びかけ語の前に生起していることを前提として、+COUNT となる。

それぞれの冠詞が素性ごとにどの値をとるかを明確にすることで、それぞれの冠詞がどう対立しているのかを知ることができる。そこで町田(2000)は、対立を明確にすることによって冠詞体系の指導過程を構築することを試み、2つの授業プランを作成した(以下、先に実践した方を「町田プラン」、改訂して実践した方を「改訂町田プラン」とする)。冠詞の対立をどのような順序で教えるかについて、町田(2000)は図1のように仮定している⁷。

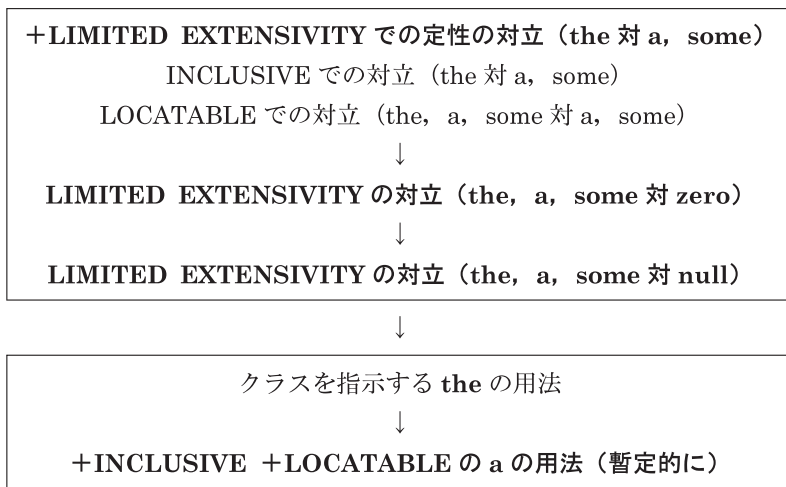


図1. 町田(2000)が仮定した冠詞の対立の指導順序

7 町田(2000)は「COUNTの素性は冠詞体系の指導ではなく count/massの対立の指導の中で行われる」と考えたため、COUNTの対立は仮定に含まれていない。

筆者たちが注目したのは、町田プランの実践を踏まえ、the の「総体への指示」という特性、the の共有集合、共有集合の話し手と聞き手の一般的知識との関係について改訂された、改訂町田プランである。ここでは、改訂町田プランにおいて実践され、筆者たちが特に注目した the, a, some の定性に関わる教育内容に言及する。

4つの素性のうち、LIMITED EXTENSIVITY の値によって対立を大別し、+LIMITED EXTENSIVITY のうち、the, a, some における INCLUSIVE での対立と LOCATABLE での対立を提示する。町田は、このように素性の値によって対立をグループ化して順序立てることで、冠詞の対立を教育内容として取り扱うことができるとした。

ただ、筆者たちが取り扱った the, a, some 対ゼロ冠詞の部分は、改訂町田プランでは取り扱われていない。このことについては後述する。また筆者たちは、count の普通名詞と生起する冠詞のみを取り扱うこととしたので、授業プランにおける COUNT の導入を見送っている。それにともなって、固有名詞と生起する null 冠詞も取り扱っていない。

以下に筆者たちの検討の結果を述べる。

町田 (2000) は教育内容の構成において、冠詞の定/不定⁸の区別を包括性と発見可能性によって定義している。これは町田 (2000) の教育内容構成が、主に Hawkins (1978) や Chesterman (1991) の冠詞体系に依拠しているからである。筆者たちは、包括性と発見可能性による定/不定の区別ではなく、別の定義による定/不定の区別に基づいて教育内容を構成するとどうなるのだろうか、と考えた。

また、改訂町田プランでは LIMITED EXTENSIVITY の値が冠詞の使い分けにどう影響するのかを指導する過程が構成されていない。これは授業時間の関係で省かざるを得なかったという事情によるものだが、町田自身も今後の課題として挙げており、具体的にはゼロ冠詞や null 冠詞の指導を加え、実践することが必要だとしている。この必要性については、筆者たちの授業プランにおいて、特にゼロ冠詞と some の対立によるゼロ冠詞の導入が必要であることを次節で述べる。

筆者たちは、別の定義による定/不定の区別、ゼロ冠詞の導入という2つの点において、町田 (2000) とは違った視点から冠詞体系の教育内容構成ができるのではないかと考えたのである。

2. 教育内容構成

筆者たちは教育内容を構成するにあたって、*The Cambridge Grammar of the English Language* (2002) (以下、CGEL とする) に依拠した。筆者たちの先行研究である町田 (2000) は、冠詞体系の記述に用いられてきたこれまでの概念を検討し、より明示的な理論を確立しようとした。その概念とは次の通りである。

親知性 (familiarity) : 「聞き手も話し手もすでに知っている」

同定可能性 (identifiability) : 「それだとわかる」

唯一性 (uniqueness) : 「1つしかない」

包括性 (inclusiveness) : 「聞き手と話し手の共有集合内の指示対象すべてを指すか否か」

発見可能性 (locatability) : 「聞き手と話し手の共有集合内に指示対象が存在するか否か」

8 筆者たちの定/不定の定義は次節で述べる。

前節で述べたように、この中で町田は、包括性 (inclusiveness) と発見可能性 (locatability) を軸にして授業プランを構成した。筆者たちは、町田が認定した冠詞の部分集合 (the, a, 強勢のない some, ゼロ冠詞) を引き継ぎ、the を定、その他を不定だと認定している。ただし、同定可能性 (identifiability) が冠詞の定/不定を区別するための基本的概念であるという立場に立って、教育内容を構成している。以下の項で筆者たちによる教育内容を提示する。

2.1 定 (definite)/不定 (indefinite) の区別——同定可能性 (identifiability)

冠詞の選択にはまず、定/不定の区別が必要になる。この項では、定/不定の定義づけを行うとともに、その区別のための理論を述べる。

初めに定冠詞の検討を行う。次の例文を見てみよう⁹。

(11) Bring me [*the ladder/ladders/cement*]!

この例文は、定冠詞である the が、すべての普通名詞と適合性のあるものだというを示している。話し手の言いたい指示対象が count の普通名詞であろうと、non-count (本論文 42 ページでいう mass にあたる) の普通名詞であろうと the は生起されるのである (この例文では、個物の ladder, ひとまとまりの ladder, cement の量などを示していると言える)。

このとき the は、話し手による「聞き手が指示対象を同定できるだろう」という予想のもとに使用されているのだが、その考え方こそが同定可能性なのである。町田 (2000) は、同定可能性を「それだとわかる」と定義したが、筆者たちは同定可能性を「どれだかわかる」と定義している。これは、聞き手に which という疑問文で聞き返されることがないような、最良の理解を促すものだとする CGEL における同定可能性の概念に基づいている。CGEL では、この概念にしたがって、the を使用することが適切である様々な状況を述べている。たとえば前方照応的 (anaphoric) と呼ばれる、先行文脈に指示対象が同定できるかどうかの判断を依存している場合や、後方照応的 (cataphoric) と呼ばれる、後に続く文脈によって指示対象が同定できるか否かを判断する場合などである。

次に不定の冠詞について考察する。不定を表す冠詞はひとつではないが、まずは a に限定して述べていく。CGEL では、聞き手が指示対象 (単数名詞に限定される) を同定できると予期されてはいないとした上で、次のような例文で the との違いを検討している¹⁰。

(12) Bring me *a ladder*!

不定冠詞の a が使用可能なシナリオとして、次のような2つが想定される。ひとつは、聞き手の視界の中に2つ以上のはしごが存在しているときである。この文からは、どのはしごのことを言っているのか聞き手が同定できるとは予期されない。もしこの場面で the を使用すると、先述の理論より ‘Which ladder?’ と聞き返されることが予想できる。そのため、以上のような場面では the を使用することは不適切だと言える。2つめは、聞き手の視界の中にはしごが全く存在しない場面である。はしごを同定するための手がかりがない場面でも a を

9 CGEL (2002 : 368)

10 CGEL (2002 : 371)

使用することが適切なのである。その場面にはしごが存在しないのであれば、「聞き手が指示対象を同定できると予期できない」ことは自明のことであるからだ。やはりここでも the を使用することは不適切なのである。

次に強勢のない some とゼロ冠詞について述べていく。CGEL では、some をあくまでも数量詞として取り扱っている。some の用法の一部のみを取り上げて冠詞だと認めることは不適切だとして、some を不定の冠詞として認めてはいない。しかし筆者たちは定／不定を区別するにあたって名詞に単数／複数という区別があることに注目し、強勢のない some を不定の複数を示すものだとして the との対比の中で捉え、冠詞として認める立場を取っている。そして、不定の複数を示す強勢のない some とゼロ冠詞を対立させ、冠詞体系の中に組み込むことで教育内容を確立する。不定の複数を示すこれら 2 つの冠詞については 2.3 で詳しく述べる。

以上論じてきたことから、定／不定の定義は次のようになる。すなわち「どの指示対象のことを言っているのか聞き手はわかるだろう」と話し手が予期していることが定であることの定義であり、反対に「どの指示対象のことを言っているのか聞き手はわかるだろう」と話し手が予期していないことが不定であることの定義である。この定義は同定可能性という概念に基づいているものである。

2.2 唯一性 (uniqueness) ゆえの同定可能性 (identifiability)

なぜ「聞き手は同定できる」と話し手が予期できるのであろうか。ここで登場するのが唯一性という概念である。CGEL では、唯一性ゆえの同定可能性という概念をあげている。唯一性とは、指示対象が「ひとつしかない」個物的なものであるということの意味する。すなわち名詞句において冠詞を取り除いた残りの部分によって表現される記述を満足させる存在物が、ひとつしか存在しないことを示すものである。これは言い換えれば、指示対象がもつ唯一性ゆえに同定可能なために定だとされるケースを表すものである。次の例文を見てみよう¹¹。

(13) Where did you park *the car*?

(14) *The first person to run the mile in under four minutes* was Roger Bannister.

(13)は、定である指示対象（この例文では車）を聞き手がすでに見知っていると推測されるような基本例を示している。聞き手が今まで車を運転しており、おそらく、ある 1 台の車というよりも、聞き手は詳細に指示対象（聞き手の運転していた車）のことを知っているであろうと推測されるケースである。聞き手は「どの車のことか」と聞き返す必要がない。話し手の言う指示対象がどの車のことかわかるからである。また(14)では、定である主語名詞句の the を取り除いた部分によって唯一の個人が定義されているので、「4 分以内で 1 マイルを走ったどの最初の人か」と質問することはつじつまが合わない。4 分以内で 1 マイル走る人がだれであるのか知ることなしに、例文の記述を理解できるのである。この 2 つの例文では、指示対象がもつ唯一性ゆえの同定可能性が成立している。

この唯一性ゆえの同定可能性は、指示対象が複数である場合にも拡張される。次の例文を見てみよう¹²。

11 CGEL (2002 : 368)

12 CGEL (2002 : 369)

(15) Where did you put *the keys*?

この例文において唯一性の概念は、個物というよりもむしろ1つの集合に適用される。鍵の集合をひとまとまりのものとして捉える¹³ことで、唯一性ゆえの同定可能性が成立するのである。

CGELでは、唯一性ゆえの同定可能性を定であることの説明としているが、同定可能性という側面だけを見れば、必ずしもそこに唯一性が存在するというわけではない。唯一性が成り立たなくても同定可能性が成立する場合がある。そこで筆者たちは、唯一性が成り立たないが同定可能性が成立する状況も取り込むために、Christopher Lyons (1999) の考察を参照することにした。Lyons は次の例文を示している。¹⁴

(16) (ドアが3つある部屋の中で、1つが開いている場面)

Close *the door*, please.

CGELの理論から判断すると、この例文のような状況において、名詞句の主要部であるドアという記述だけでは、3つあるドアのうちどれのことを言っているのかが明らかではない。それにもかかわらず定冠詞の *the* が使用されているのは、一体なぜなのだろうか。これは、名詞句の主要部 (door) だけを捉えると唯一的ではないが、動詞 (close) の部分を考えることによって閉めるべきドアが、明白に同定できることを表しているのである。つまり、指示対象そのものが唯一性をもつとは言えないが同定できる (つまり定である) ことを示す手がかりが文中に存在することで定だとわかるのである。

2.3 some とゼロ冠詞の区別

この項では強勢のない *some* とゼロ冠詞を不定の冠詞として位置付けている文献の中でも、Marianne Celece-Murcia & Diane Larsen-Freeman, *The Grammar Book* (1999²) と Micheal Swan, *Practical English Usage* (2005³) を取り上げ、それら2つの文献における理論の観点から、本論文の冠詞指導体系における、強勢のない *some* とゼロ冠詞の位置づけを行うこととする。

Celece-Murcia & Larsen-Freeman は、強勢のない *some* とゼロ冠詞の違いを次の例文で示している。¹⁵

(17) I need *stamps*.

(18) I need *some stamps*.

13 CGELでは、これを総体性 (totality) と表現している。たとえば、そこに5個の鍵があったとする。このとき、2個、3個、4個の鍵を含んでいる多数の補集合が存在する。しかしその補集合の数は無関係である。鍵の集合を、文脈における唯一の最大集合と考えることにより、どの集合のことか同定可能となる。

14 Lyons (1999: 14)

15 Celece-Murcia & Larsen-Freeman (1999²: 278)

(17)の例文においては、指示している stamps はどのような stamps でもかまわないということ述べているものであり、指示対象が数量について全く無関係であることを示すものだとしている。それに対して some を使用している(18)の例文においては、指示対象の数についてははっきりと明言してはいないものの、必要としている stamps の数に関して制限を課している。

同様に Swan は、話し手が、限られてはいるがどちらかという不定の数（や量）について考えているときには、some を使用することが好まれると述べている。はっきりとした数について言わない（知らない、または考慮しない）ときに some を使用し、数（や量）について全く考慮しないというときには、筆者たちの言うゼロ冠詞を使用するのが適切だと述べている。次の例文を見てみよう。¹⁶

(19) We've planted *some roses* in the garden. (限られた数；話し手はいくつか言っていない)

(20) I like *roses*. (数の観念なし)

(19)は、数については言わないが、ある制限された数について言いたいときに使用されるということを示しており、(20)は、数について全く考慮しないときに使用されるということを示している。

これら2つの文献で共通していることは、いずれも不定の複数名詞を指示する冠詞のうち、数についての言及はしない／できないが、数がいくつかはあるものを言いたいときは強勢のない some を使用し、数ではなく種類（カテゴリ）を言いたいときはゼロ冠詞を使用するということである。

以上の考察から、筆者たちは冠詞体系を次の図2のように整理した。

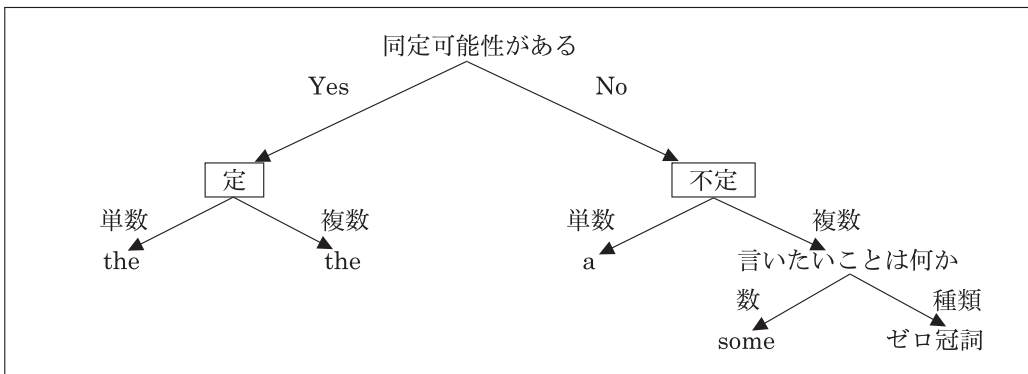


図2. 筆者たちが認める冠詞体系（ただし、count の普通名詞に限る）

2. 4. 教育内容の構造

筆者たちは、これまで述べてきた冠詞についての理論から教育内容を構成する。その順序構造は次のとおりである。

16 Swan (2005³: 58)

冠詞体系の指導にあたり、同定可能性による定／不定の区別は、冠詞と生起する count の普通名詞が単数形の場合と複数形の場合とにわけなければならない。なぜならば、定の場合には、名詞が単数形であろうと複数形であろうと the が選択されるが、不定の場合には、名詞が単数形か複数形かによって、選択する冠詞が a, 強勢のない some, ゼロ冠詞のどれかに決まるからである。さらに、複数形の名詞と生起する冠詞が不定である場合は、some とゼロ冠詞のどちらを選択するのを示す基準が必要になる。筆者たちは、話し手がいいたいことが数と種類のどちらであるかを基準とした。

したがって名詞が単数形の場合と複数形の場合とに大別したうえで、まずは名詞が単数形の場合を考察してゆく。ここでは定を表す the と不定を表す a のみを取り上げ、同定可能性によって定／不定が決まることを示す。同定可能性が唯一性ゆえに成立することを理解させたいうえで、唯一性がなくとも成立することもあわせて理解させる。これによって生徒たちに同定可能性がどのような概念であるかを理解させ、それによって the と a, つまり定／不定の区別ができることを理解させる。

次に名詞が複数形の場合を考察させる。ここではまず、複数形の名詞と定の冠詞が生起する場合を提示し、単数形の際に認識した定／不定がどのように決まるかということ、複数形の際にも適用することを生徒たちに理解させる。そして複数形の名詞と定の冠詞が生起することを認識させたのちに、不定の複数形において話し手の言いたいことは何かという基準によって強勢のない some かゼロ冠詞かを区別することを理解させる。

3. 授業プラン「Yes! We 冠詞!」とその解説

筆者たちは 2.4. で構成した教育内容から、冠詞体系を指導する授業プラン「Yes! We 冠詞!」を作成した。

「Yes! We 冠詞!」は、図 2 をプランの主軸として構成している。まず名詞が単数形の場合と複数形の場合とで授業プランを大別し、フローチャートの分岐に従って、定／不定の区別、「数」が「少しある」のか「関係ない」のかという冠詞選択の基準を指導していく。最終的に、フローチャートの分岐の基準に従って、練習問題を解答できるようになるのが「Yes! We 冠詞!」の目標である。

3. 1. 名詞が単数形の場合

定／不定の区別の基準となる同定可能性には、唯一性によるものと唯一性によらないものがある。よって筆者たちの授業プランでは、名詞が単数形の場合を、唯一性による同定可能性が定／不定の区別の基準になる場合と、唯一性によらない同定可能性が定／不定の区別の基準になる場合に分け、それぞれの問題を作成した。

まず、問題 1 の(1)と(2)で、唯一性ゆえの同定可能性による定／不定の区別を問う。状況や発話された名詞から、話し手の立場になって「どれのことを言おうとしているのか相手はわかると思う／思わない」という視点から冠詞を選ぶことができるよう出題した。また問題 1 は、生徒たちが中学校などで既に得ている冠詞についての知識だけを頼りに答えさせる。「the はそれ」または「the は特定のもの」、「a はひとつ」といった、現行の教科書に基づいた学校教育から得た知識だけでは、問題 1 を解く際に混乱が生じると考えたためである。生徒たちが既に得ていた冠詞の知識を揺らがせるような問題をあえて出すことで、冠詞体系を指導するための

導入とした。

問題 2 でも、唯一性ゆえの同定可能性による定／不定の区別を問う。ここでは、特に唯一性が状況と発話された名詞によって決まることを示すような問題を出す。また問題 2 も、問題 1 と同様の理由で、生徒たちが中学校などで既に得ている冠詞についての知識だけを頼りに答えさせる。

問題 3 では、唯一性はないが同定可能性がある場合の定／不定の区別を問う。状況や話し手の発話から、「どれのことを言おうとしているのか相手はわかると思う／思わない」を問うことは、問題 1 や問題 2 と変わらない。しかし問題 3 では、同定可能性があるかどうかについて、状況と発話された名詞（つまり唯一性）によって決まるのではなく、状況と名詞、そして名詞句を目的語としてとる動詞によって決まる状況を設定する。問題 1・2 と問題 3 を比較することによって、唯一性ゆえの同定可能性と唯一性によらない同定可能性の違いがわかるようにしたのである。

問題 1

問題 1 の(1)は、3つのハンマーの中からひとつを取ってくるよう頼む問題である。しかし、指示対象のハンマーに同定可能性がないため、絵や発話からは、どのハンマーのことか聞き手はわかるだろうと予想できない状況となっている。それに対して(2)は、ひとつのハンマーのうちひとつを取ってくるよう頼む問題だが、この場合は、状況から指示対象のハンマーには唯一性があるので同定でき、どのハンマーのことか聞き手はわかるだろうと予想できる。

授業プラン p.1 (授業プランは本稿末尾)

問題 2

問題 2 は、4つのハンマーの中からひとつの大きなハンマーを取ってくるよう頼む問題であるが、大きなハンマーがひとつだけであることと、名詞句から冠詞を取った残りの部分が big hammer であることから、指示対象の大きなハンマーには唯一性があるので同定できる。よって、聞き手はどのハンマーのことかわかるだろうと予想できる。

授業プラン p.2

問題 3

問題 1 や問題 2 とは違い、指示対象はハンマーからドアになる。問題 1・2 とは違い、唯一性がある場合の同定可能性と、唯一性がない場合の同定可能性の両方が存在するというを示す問題である。4つのうちドアがひとつだけ開いているという状況と、発話が「ドアを閉めてください」と頼んでいることから、唯一性がなくても同定可能性があるので、聞き手は話し手が閉めてほしいドアを同定できる。

授業プラン p.3

これさえ見れば the と a の使い分けはバッチリ！！

問題 3 が終わってから、図 2 から最初の分岐を抜粋したものを配布する。この時点では、「どれのことを言おうとしているのか相手はわかると思う／思わない」という基準から、名詞が単数形の場合に the と a のどちらを選べばよいか判断できるということを示す。これによ

て、生徒は問題4以降の問題を「どれのことを言おうとしているのか相手はわかると思う／思わない」という基準を参考にして考えることができるはずだと筆者たちはもくろんだ。

授業プラン p.4

3. 2. 名詞が複数形の場合

ここでは冠詞と生起する名詞が複数形である場合の問題を提示する。

まず問題4で、状況や発話から同定可能性がある場合を提示し、名詞が複数形である場合にも定ならば the を使うということを示す。つまり、名詞が複数形でも「どれのことを言おうとしているのか相手はわかると思う／思わない」という基準が有効であることを認識させる問題である。

次に問題5で、名詞が複数形である場合に同定可能性がない場合、どの冠詞を使うべきか考えさせる問題を出す。この問題5で冠詞としての some を導入する。その次の解説で、複数形の名詞と生起する some は、はっきりとした数について言わない（知らない、または考慮しない）ときに用いられることに言及する。冠詞としての some は強勢がないこと、他の数量詞とは違って具体的な数量について明確でないことを説明する。

そして、《数か種類か》というコラムで some とゼロ冠詞の対立について言及する。some がはっきりとした数について言わない（知らない、または考慮しない）ときに使用する冠詞であるのに対し、ゼロ冠詞は数（や量）について全く考慮しないというときに使用する冠詞である。このような some と zero 冠詞の対立を、授業プランでは「数」を表す some と「種類」を表すゼロ冠詞と特徴づけ、例文を使って解説する。

問題4

3.1.のように、同定可能性による定／不定の区別ができるかどうかを考えさせる。しかし問題4では、問題1・2・3とは違い、指示対象となるオレンジが複数ある。発話を受けた聞き手がテーブルの上に複数あるオレンジをすべて話し手のもとに持ってきたという状況から、the が「指示対象をひとまとまりにして」指示していることに気づくところまで到達することを期待して、この問題を作成した。このとき、状況と発話から同定可能性があると言えるため、the oranges はテーブルの上にある複数のオレンジひとまとまりを指示していることがわかる。よってこの場合の the は、指示対象が複数ある場合にそれらをひとまとまりとして表しているといえる。

授業プラン p.5

問題5

名詞が複数形で指示対象を同定できない不定の場合、生起する冠詞は何かを問う。問題5の場面設定では、聞き手は、状況や発話から話し手が昨日植えたバラを同定できない。よって the は問題5では使えない。しかし、名詞が複数形なので、不定の冠詞 a も使うことができない。ではどうすればよいのかと、あえて選択肢を設けずに考えさせる。選択肢を設けないのは、a few や a lot of, many などの数量詞の使用を許容することで、なぜ他の数量詞でなく some なのかを後に解説しやすくするためである。状況や発話はバラを同定させないばかりでなく、バラの具体的な数量も示していない。このことから、数の多さ／少なさについて明確でない不定の冠詞 some を正答とした。

次の解説ページで、some は冠詞として「いくつなのかは言わない／言えないけど、少し（少なくとも2つ）はある」ことを示すと説明する。冠詞としての some は強勢がないことを先に述べておき、他の数量詞とは違って、冠詞としての some は数の多さ／少なさについて明確でないということを、some が正答となる根拠として示す。

授業プラン p.6, p.7

これさえ見れば the と a, some の使い分けはバッチリ！！

問題5が終わってから、図2から the, a, some までの分岐を抜粋したものを配布する。これによって、名詞が単数形でも複数形でもまず「どれのことを言おうとしているのか相手はわかると思う／思わない」という基準で定／不定を区別することができ、定ならば the, 不定で名詞が単数形ならば a, 複数形ならば some を選ぶことができるようになる。

授業プラン p.8

《数か種類か》

このコラムで、some とゼロ冠詞の対立から、ゼロ冠詞を「目に見えない冠詞」として導入した。some とゼロ冠詞の対立については、「数」を表すか「種類」を表すかという違いを示すことで、わかりやすく説明しようとした。

まず、some について、「限られてはいるがどちらかという不定の数（や量）について考えている」とは、指示対象の「数」を表しているということである。よって、some が表していることを、「数」が「少しはある」という表現で教材化し、これが some を選択する基準であるとした。

また、zero 冠詞について、「数や量について全く考慮しない」ということは、ゼロ冠詞によって存在物のクラス、類、カテゴリーといったものが前面化するということである。このことから some が「数」をあらわすのに対して、ゼロ冠詞は「種類」を表すのだといえる。よって、ゼロ冠詞が「種類」を表すことを、「数」は「関係ない」という表現で教材化し、これがゼロ冠詞を選択する基準となる。

よって、授業プランでは、「数」が「少しある」のか「関係ない」のかを some とゼロ冠詞の対立の基準とした。

授業プラン p.9

これさえ見れば冠詞の使い分けはバッチリ！！

ここで図2の完全版を配布する。このフローチャートが授業プランを総括するまとめとなる。「これさえ見れば the, a, some の使い分けはバッチリ！！」では、不定で名詞が複数形の場合の到達点は some だったが、このフローチャートではさらに「数が少しある／関係ない」に分岐し、some と zero 冠詞のどちらを選ぶかの基準となっている。

授業プラン p.10

練習問題1と練習問題2

いずれの問題も、「これさえ見れば冠詞の使い分けはバッチリ！！」を参考にして解けることを想定している。

練習問題1では、名詞が単数形の場合に定／不定を区別させる問題を出題した。(1)の文は大西泰斗／ポール・マクベイの『ハートで感じる英文法』(2006)の32ページから引用した。(1)の文と状況から、話し手が言っている左のスピーカはどれなのか、聞き手はわかると思われる。よってtheが答えとなる。一方、(2)の文と状況から、店員が言っている車はどれのことなのか、聞き手はわかると思えない。名詞が単数形なので、答えはaとなる。

練習問題2では名詞が単数形の場合と複数形の場合を混在させ、定／不定の区別、「数」が「少しある」のか「関係ない」のかを考えさせる問題を出題した。(1),(2),(3)の文はJohn Shepherd, Richard Rossner & James Taylor, *Ways to Grammar* (1984: 214, 215)より引用した。(1)の文の場合、話し手が会ったという有名な俳優とは具体的にだれなのか、聞き手がわかると思えない。そして名詞が複数形であり、会った人数については少しはいるはずなので、答えはsomeとなる。(2)の文の場合も、話し手が言っているタマネギがどれのことか、聞き手がわかると思えない。そして名詞が複数であり、タマネギの「数」は関係ないので、答えはゼロ冠詞となる。(3)の文も同様に、話し手が言っている本がどれのことか、聞き手にわかると思えない。名詞が複数形で、本の「数」は関係ないので、答えはゼロ冠詞となる。(4)の場合、話し手が言っている鉛筆はどれのことなのか、聞き手はわかると思えない。名詞は単数形なので、答えはaとなる。(5)では、どのしっぽのことを言っているのか、相手はわかると思われる。よって、答えはtheとなる。

授業プラン p.11

表紙

表紙を配布し、授業プランを終了する。父親が発話したthe bookがどれのことか娘がわかっていないという状況を提示し、授業プランのテーマである定／不定の区別の必要性を表している。

授業プラン表紙

4. 「Yes! We 冠詞!」の授業実践

4.1. 授業記録とその分析

ここでは「Yes! We 冠詞!」の授業の概要について述べる。本授業プランによる授業(50分×2回)を、2009年10月22日、倶知安農業高校の1年生を対象に実施した。授業に参加したのは24名(男20名、女4名)であり、授業者は山田耕平である。

以下は授業の記録である。ここでは、重要な発問・解答について分析する。なお、記述の上ではTを授業者、Sを生徒とする。

・授業プラン

問題1

〔授業記録〕

T: それでは、問題1の(1)(2)の答えとその理由を聞いていこうと思います。

S1君、(1)の答えはどうなりましたか。

S1: (ア)です。

T：理由は、何て書きました？

S1：3つあるから。

T：3つあるから(ア)にしたと。ちなみに(2)の答えは何にしました？

S1：(イ)にしました。

T：その理由は？

S1：1つしかないから。

T：なるほど。あと、数名の方に聞いていきます。誰にしようかな…S2さん、(1)の答えはどうなりましたか。

S2：理由は3つのもののうち、ひとつだから、(ア)にしました。

T：3つのもののうち、ひとつだから、(ア)であると。(2)のは何にしました？

S2：(2)は(イ)で、ひとつのものを選んでるから。

T：ひとつのものを選んでるから(イ)であると…。ありがとうございます。では、もう一人、S3さん、(1)はどうでしょう。

S3：答えは(ア)で、ハンマーが複数あるから。

T：ちなみに(2)は(ア)と(イ)のどちらにしました？

S3：答えは(イ)で…

T：理由は？

S3：ハンマーがひとつだけだから。

T：なるほど。ここで、今板書されている内容とは、違った答えを書かれた方はいらっしゃいますか？ いらっしゃいますね。S4さん、(1)の答えは何にしました？

S4：(ア)にしました。理由は、そのハンマーを持っている、「その」の部分だから。

T：ちなみに(2)の答えは？

S4：(イ)

T：理由は？

S4：ひとつを表すから。

T：なるほど。ひとつを表すから(イ)であると。あと、どうです？ こういう答えを書いたんだけど、という方いらっしゃいますか。それでは、板書の内容を復唱していきます。

解答に関して、(1)では、すべての生徒が、(ア)を選択していた。その理由を見てみると、「3つあるから」「ハンマーが複数あるから」というものであり、これは、ハンマーがひとつではないため、生徒たちは(ア)を選択したものと考えられる。また、theは「その」という意味を持っているからという趣旨の発言をした生徒もいたが、これも、theは「その」を表す時に使うという規則を適用したものと考えられる。(2)では、生徒全員が(イ)を選択していた。その理由を見ると、「ひとつしかないから」「ハンマーがひとつしかないから」というものであり、これは、絵には、ハンマーがひとつしかないため、(イ)を選択したものと考えられる。

この問題1より、生徒たちが中学校三年間で身に付けた冠詞の知識というのは「theは『その』を表す時に使う」「aはひとつのときに使う」という意味の羅列といってもよいものであり、一つひとつ冠詞の意味をその都度ばらばらに積み上げてきてきた様子が窺える。

問題 2

〔授業記録〕

T: 先ほどと同様に, 数名の方に問題 2 の答えとその理由を聞いていこうと思います。

では, S5 君, (ア)と(イ)どっちにしました?

S5: (イ)です。

T: (イ)にしたと。その理由は?

S5: ハンマーは複数あるけど, 大きなハンマーはひとつだから。

T: ハンマーは複数あるけど, 大きなハンマーはひとつだから, (イ)にしたんだね。なるほど。

では, S6 君, (ア)と(イ)どっちにしました?

S6: (イ)。

T: (イ)にしたと。その理由は?

S6: 指定しているハンマーは大きなハンマーで, その大きなハンマーは1つしかないから。

T: 指定している大きなハンマーはひとつしかないから, (イ)であると。じゃあ, もう一人くらい…S7 君, 答え, どうになりましたか。

S7: (ア)で…

T: 理由は?

S7: 複数あるハンマーのうち大きなハンマーだけを持ってきてくださいと言っているから(ア)ではなく(イ)。

T: なるほど。あと, こんな答え書いた方いらっしゃいます? では, S8 君どうでしょう。

S8: (ア)。

T: 理由は?

S8: カンです。

T: 何となくということだね。じゃあ, ここで皆さんから出た答えを確認したいと思います。

解答に関して, 問題 2 では, 生徒たちの答えが分かれることとなった。理由を見てみると, (ア)を選んだ生徒は, 「複数あるハンマーのうち, 大きなハンマーだけを持ってくるということ」という答えを書いたのに対し, (イ)を選んだ生徒は「ハンマーは複数あるが, 大きなハンマーはひとつしかない」「指定しているハンマーは大きなハンマーで, その大きなハンマーはひとつしかない」という答えが書かれており, どちらの選択肢とも, 理由に相違はなかった。

これらの解答より, 生徒たちは, 状況や話し手の発話から, 同定可能性があることに気づいてはいるものの, 唯一性ゆえの同定可能性がある場合の定/不定の区別という視点では冠詞を選択していないことが窺える。

問題 3

問題 3 は, 問題 1・問題 2 の答え合わせを終えたあとに行った。ただし, ここでの答え合わせは, 答えを言うだけに留めた。

〔授業記録〕

T: それでは, 先ほどと同様に答えとその理由を聞いていこうと思います。

では, S9 君, お願いします。

S9: (ア)で, 開いているドアは 4 つのドアのうち 1 つだから。

T：なるほど、開いているドアは4つのドアのうち1つだから(ア)であると。

では、その隣に座っている S10 君はどうでしょう。

S10：(ア)で…。

T：その理由？

S10：問題2と問題3の形が似ているから。

T：問題の形式が似ているから(ア)であると。はい、じゃあ、S11さん、答え何にしました？

S11：(ア)。

T：その理由は？

S11：開いているドアが1つしかないから。

T：開いているドアが1つしかないから、(ア)であると。なるほど。ちなみに、(イ)を答えにした方はいます？ S7君(イ)にしました？ その理由？

S7：開いているドアは1つだけで、開いていないドアに“Close the door, please”と言っても、文として成立しないから。

T：うん、なるほど。S7君以外の方で(イ)にした人います？ いないみたいですね。それでは、みなさんから、頂いた答えを確認していきたいと思います。

※問題3のあとに、図2で示したフローチャートから最初の分岐を抜粋した〔これさえ見れば the と a の使い分けはバッチリ！！〕を生徒たちに配布し、口頭で説明を行った。

解答に関して、(ア)を選んでいる生徒が大半であった。その理由を見てみると「開いているドアは4つのドアのうち1つだから」「問題2と聞かれていることが似ているから」といったものが挙げられた。

この解答を見る限り、確かに、問題1・問題2を通して、大半の生徒は正解にたどりついているように思える。しかし、「問題2と聞かれていることが似ているから」といった理由が生徒の中から出てきたように、唯一性がなくても同定可能性があるという理解にまでは至っていないことが予想される。また、「開いていないドアに“Close the door, please”と言っても、文として成立しない」から(イ)という答えを選んだ生徒がいたように、同定可能性があることに気づいてはいるものの、誤った冠詞を選択した生徒も見受けられた。

そのため、問題3において、唯一性ゆえの同定可能性がある場合と唯一性はないが同定可能性がある場合を生徒たちに認識させるうえで、問題2のあとにフローチャートを使った解説を配布し、唯一性ゆえの同定可能性による定／不定の区別を認識させる必要があったと考えられる。

問題4

〔授業記録〕

T：それでは、先ほど同様に数名の方に聞いていこうと思います。

では、S11君、the が表していることを何て書きましたか。

S11：「そこのオレンジを取りなさい」ということ。

T：なるほど。では、S12君、どうでしょう。

S12：「テーブルの上に置いてあるオレンジ全部」のことを表している。

T: 「テーブルの上に置いてあるオレンジ全部」のことを表している。

うん, なるほど。じゃあ, あと一人だけ。S13 君どうでしょう。

S13: 「テーブルの上のオレンジ全部」

T: S12 君と同じで, 「テーブルの上に置いてあるオレンジ全部」ということですね。

今, このような3つの答えが出ましたが, その通りなんです。the は, 机の上に置いてあるひとまとまりのオレンジのことを表していて, 「どのオレンジのことを言おうとしているのか, まさみちゃんはわかる」と思うから the を使用しているんですね。

先ほど, 表で確認しましたが, 「どれのことを言おうとしているのか, 相手はわかる」と思うときは, 単数でも複数でも the を使えるということなんです。

解答に関して, フローチャートを使って答えを導く生徒が多かったが, どう言葉に表してよいか戸惑っていた様子が見受けられた。筆者たちは, この状況設定から, 個別的事実ではなく, 名詞が複数形であっても「どれのことを言おうとしているのか相手はわかる」と思う場合には, the を使用するという, 一般論での答えを想定していたが, 「そのオレンジを取りなさい」や「テーブルの上に置いてあるオレンジ全部」といった, 個別的事実を答えとする生徒が大半であった。生徒の答えを見る限り, 確かにフローチャートをもとに, 名詞が複数形の場合においても, 発話や状況から同定可能性である場合, the が使用できることを生徒たちは認識しているように思われる。しかし, 一般論で答えた生徒は皆無であることから, 問題5に関しては, 個別的事実を問う問題が適切であったと思われる。

そのため, 話し手の発話を受けた聞き手が, 一部のみかんだけを持ってきて, 話し手が困っているような場面を設けるなど, 総体性が明らかになるような問題設定が必要であったと考えられる。

問題 5

〔授業記録〕

T: それでは, 数名の方に()の中に入る表現と, その理由を聞いていきたいと思います。では, S14 君どうでしょう。

S14: beautiful.

T: 理由?

S14: 美しいから。

T: そのバラが美しいから, beautiful が入るんじゃないかと。

では, S2 さんはどうでしょう。

S2: the です。

T: 理由は何て書きました?

S2: 相手がどれのことを言っているのかわかるからです。

T: 相手がどれのことを言っているのかわかるから, the ではないかと。

では, S3 さん, どんな答えになりましたか。

S3: the.

T: 理由はどうでしょう?

S3: 「その」バラと訳せるので。

T：なるほど。「その」バラと訳せるので，the ということですね。

これ以外に，こういう答えを書いたよという方はいますか。S7 君，どう？

S7：a です。

T：理由？

S7：まだ，まとまっていないんですけど，相手がどんなバラのことまでは，わかっていないんで。

T：なるほど。相手がどんなバラのことまでは，わかっていないので，a だと。

それでは，ここで皆さんから出た答えをもう一度確認していきます。

※問題 5 のあとに，図 2 のフローチャートから the, a, some までの分岐を抜粋した〔これさえ見れば the と a, some の使い分けはバッチリ！！〕を生徒たちに配布し，口頭で説明を行った。

生徒から出てきた解答であるが，「相手がどんなバラかまでは分かっていないため，a を使用する」というように，生徒たちは，状況や発話から話し手が，昨日植えたバラを同定できないため，the は使用できないという認識はできていることが確認できる。ただ，名詞の数に注意は向けられてはいるものの，指示対象を同定できない冠詞は，a 以外には思いつかないため，一時間目の授業で出てきた a を使ってみようという意図が窺える。また，「相手がどれのことを言っているかわかるため，the を使用する」という解答も見受けられた。

これは，名詞が複数形で指示対象を同定できない不定の場合という状況を設定した，筆者たちの意図とは異なったものである。この原因であるが，第一に，名詞が複数形でも「どれのことを言おうとしているのか相手はわかると思う／思わない」という同定可能性の理解に至っていないことが考えられる。また，同定可能性の理解は出来てはいるものの，この挿し絵から話し手と聞き手の間で，同じバラのことであると認識してしまったことが要因として考えられる。

そのため，特に後者のようなことを解消するうえで，「話し手が昨日植えたバラである」と，聞き手が同定できないような状況や発話を示す挿し絵が必要であったと考えられる。

さらに，解答の中には，beautiful と答える生徒も見受けられた。これは，どの範囲で解答すればよいのか明確でなかったことが原因として考えられる。

この問題が，指示対象の数量に関して，限られてはいるがどちらかという不定の数（や量）について考えているときに使用する some の導入であることを考えると，(1)「何も入らない」(2)「以下のうち，いずれかが入る」といった選択肢を設け(2)においては，「a few」「a lot of」「some」のような選択肢を用意する)，()に入るものの範囲を示す必要があったと考えられる。

《数か種類か》

問題 5 と《数か種類か》との連動をはかるため，《数か種類か》のプリントを配布する前に，以下のような形で前置きをした。

〔授業記録〕

T：それでは，みなさん。6 ページの問題 5 をもう一度見てください。I planted のあとには，some が入りましたよね。書き込んでいない方は，今書き込んでください。で，I planted

some roses in the garden yesterday. という文章がありましたよね。私は昨日、庭にバラを植えたんだという。たとえば、その後、同じ人が、こういうことを言ったとします。I like roses. 私はバラが好きなんだと。最初の文章とは違って、I like roses. の roses の前には、the, a, some のような冠詞は見当たりませんよね。じゃあ、なぜ、見当たらないのか、それについてまとめたプリントがあるので、今からそのプリントを配布していきます。

※数か種類かのあとに、図2のフローチャートの完全版〔これさえ見れば冠詞の使い分けはバッチリ!!〕を生徒たちに配布し、口頭で説明を行った。

上記のような形で前置きした理由であるが、現行の授業プランのままでは、some が指示対象の数量に関して制限がある時の複数を示す際に選択される冠詞であるのに対し、ゼロ冠詞は指示対象において数量は全く無関係である際に選択される冠詞である、本質的な点で対立する冠詞であることを、生徒たちに明確に認識させるうえで、困難であったためである。

しかし、問題5と《数か種類か》との連動をはかるため、前置きはしたものの、効果があったとは言い難く、問題5における問題構成に不備があったものと考えられる。

これさえ見れば冠詞の使い分けはバッチリ!!

フローチャートについては、問題3のあとに、唯一性ゆえの／唯一性ではない同定可能性がある場合の定／不定の区別を認識させるもの・問題5のあとに、名詞が複数形式で指示対象を同定できない不定の場合 some を使用することを認識させるもの・そして、数か種類かのあとに、some とゼロ冠詞は『数』が『少しはある』／『関係ない』に分岐し、「数」か「種類」かにより対立するものであることを明示した完全版を配布した。

しかし、このフローチャートであるが、生徒たちに重要性は認識されてはいたものの、授業プラン全体を通し、十分に生かされていたとは言い難い状況であった。そのため、フローチャートを配布した際、授業者が口頭での説明に留めるのではなく、フローチャートの使い方を例文を通じ、生徒たちに示す必要があったと考えられる。このようなフローチャートの使い方を提示することで、「どれのことを言おうとしているのか相手はわかると思う／思わない」の「わかる」の適切な捉え方が可能になると考えられる。

練習問題1と練習問題2

練習問題1では、名詞が単数形の場合に定／不定を区別させる問題を出題したが、すべての生徒が正解に至っており、唯一性によるもの／よらないものによる同定可能性の認識ができていたものと考えられる。

練習問題2では、指示対象を同定できない不定の場合に生起する冠詞を問う問題を出題したが、練習問題1と同様に、机間巡視の際、ティーチングアシスタントによる、フローチャートの使い方の指示を参考に、大半の生徒が正解に辿り着いていた。しかし、中には、ゼロ冠詞を使用する際の基準となる「数が関係ない」という認識に至っていない生徒も見受けられた。この原因であるが、《数か種類》において、何の脈絡もなく、ゼロ冠詞を導入したことが原因として考えられる。そのため、ゼロ冠詞の導入にあたり、問題5と連動した形をとり、自然な

流れでゼロ冠詞について考察する必要があったと考えられる。

また、前述のとおり、some とゼロ冠詞は『数』が『少しはある』／『関係ない』により分岐することを、フローチャートを通じ、明確に示す必要があったと考えられる。

しかし、この練習問題の分析から、生徒たちは、「the は『その』を表す時に使う」「a はひとつのときに使う」という授業当初の不完全な認識ではなく、状況や発話から、話し手の立場に立って「どれのことを言おうとしているのか相手はわかると思う／思わない」という視点から、冠詞を選択している様子が窺える。

4. 2. 授業プランの改訂点

授業記録の分析から本授業プランの改訂点について考察する。まず、問題1・問題2であるが、これらが唯一性ゆえの同定可能性による定／不定の区別を問う問題であるのに対し、問題3が唯一性はないが同定可能性がある場合の定／不定の区別を問う問題であった。

そのため、問題1の後に解答、問題2の後にフローチャートを使った解説を導入することで、生徒たちに同定可能性には、唯一性によるものと唯一性によらないものがあることを、認識させる必要があったと考えられる。また、練習問題1が、唯一性ゆえの同定可能性がある問題構成であったことを考えると、問題2の後に練習問題1を導入することで、唯一性の理解がさらにスムーズにいくものと思われる。

このような指導過程を経ているならば、生徒たちは、問題3において、問題1・2で獲得した、唯一性ゆえの同定可能性により定／不定を区別するという新たな事実可依拠しながら、同定可能性には、唯一性によらないものがあるという認識も獲得できたと考えられる。

問題4では、個別的事実に留まるのではなく、状況や発話から同定可能性がある場合、名詞が複数形であっても定ならば the を使用するという、一般論での解答を、筆者たちは期待していたが、実際は、個別的事実に留まるものであった。そのため、問題5では、一般論を答えさせるのではなく、発話を受けた聞き手が一部のみかんだけを持ってきて、話し手が困っているような場面を設け、総体性を問う問題が適切であったと考えられる。

問題5では、問題4までで獲得した冠詞の知識と照らし合わせながら、与えられた場面を用い、名詞が複数形における同定可能性がない場合の冠詞の選択について考えさせることが授業プランの意図であった。しかし、生徒から beautiful という答えが出てきたことから、当初の意図とは異なり、どの範囲で答えればよいのか明確とはいえない問題であった。また、問題5のすぐ後の《数か種類か》でゼロ冠詞を導入することを考慮に入れると、問題5では、(1)「何もはならない」(2)「以下のうち、いずれかが入る」といった選択肢を設け((2)においては、「a few」「a lot of」「some」のような選択肢を用意する)、問題5と《数か種類か》の関連性を持たせる必要があったと考えられる。

また、この挿し絵から話し手と聞き手の間で、同じバラの事であると認識してしまった生徒もいることから、「話し手が昨日植えたバラである」と、聞き手が同定できないような状況や発話を示す挿し絵に置き換えることも必要であると考えられる。

練習問題2では、some とゼロ冠詞は『数』が『少しはある』／『関係ない』により分岐し、「数」か「種類」かにより区別することを認識させる問題構成であったが、練習問題2の(4)において、「どの鉛筆のことを言おうとしているのか相手がわかる」という場合も考えられるのでは、という意見も生徒の間から挙げられた。確かに状況や発話によっては、同定可能性

がある場合も想定できる。そのため, the/a それぞれの使用可能な状況を, 考察させる問題を設ける必要があったと考えられる。

参考文献

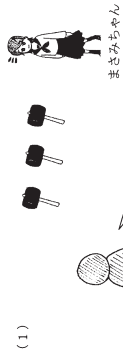
- Celce-Murcia & Larsen-Freeman. (1999²). *The Grammar Book An ESL/EFL Teacher's Course*. Boston, MA : Heinle & Heinle. pp.271-281
- Chesterman, (1991). *On Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.44-45
- Huddleston. (1984). *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.248-253
- Huddleston & Geoffrey K. Pullum. (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.368-385
- Huddleston & K. Pullum. (2005). *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.82-93
- Lyons. (1999). *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.1-15, 260-265
- Quirk, Greenbaum, Leech, Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London & New York: Longman Group Limited pp.274-277
- Swan, (1997). *Basic English Usage*. Oxford: Oxford University Press pp.38-45, pp.242-243
- (2005³). *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press pp.51-67, 538-541.
- Shepherd, Rossner, Taylor. (1984). *Ways to Grammar —A Modern English Practice Book*. Macmillan Publishers Ltd pp.205-221
- Yule. (2004). *Explaining English Grammar*. Oxford: Oxford University Press. Pp.23-52
- 大西 泰斗、ポール・マクベイ (2001) 『ネイティブの感覚がわかる英文法 読む、見る、つかむ英文法の要点 64』株式会社ノヴァ pp.30-51
- (2006) 『ハートで感じる英文法』日本放送出版協会
- (2008) 『英単語イメージハンドブック』青灯社 pp.17-42
- 織田 稔 (2007) 『英語表現構造の基礎 —冠詞と名詞・動詞と文表現・文型と文構造—』風間書房 pp.45-68
- ジャン・マレーケブ (1998) 『ネイティブ感覚の英文法』朝日出版社 pp.22-43
- 町田佳代子 (1997) 「英語の冠詞の教育内容構成の課題—英語教育における名詞句の構造と機能の指導の体系化を目指して—」『教授学の探究』14号 p.77
- (1999) 「英語の冠詞体系の指導—実験授業による検証—」『北海道大学教育学部紀要』79号
- (2000) 「英語の冠詞体系の指導に関する研究」、北海道大学大学院教育学研究科博士論文 pp.1-32
- 安井 稔 (1987) 『新しい聞き手の文法』大修館書店 pp.43-91

1. 名詞が単数形の時

< 問題 1 >

下の絵を見てください。

まさみちゃんに「ハンマーを持ってきてください」と英語で頼むとき、何と言えばよいでしょうか。(ア) と (イ) のどちらか1つを選び、その理由を書きなさい。



(ア) Bring me the hammer, please.
 (イ) Bring me a hammer, please.

答え ()
理由



(ア) Bring me the hammer, please.
 (イ) Bring me a hammer, please.

答え ()
理由

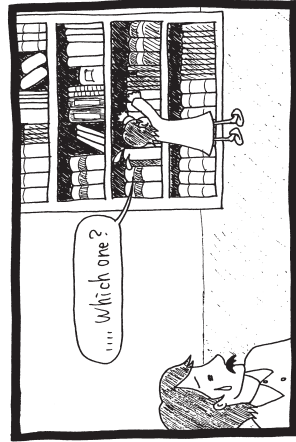
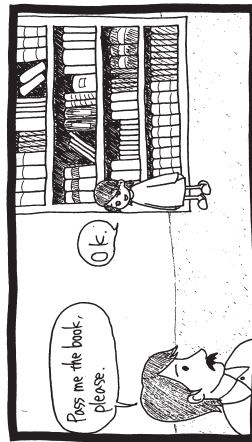
これで冠詞はばっちり!

Yes!

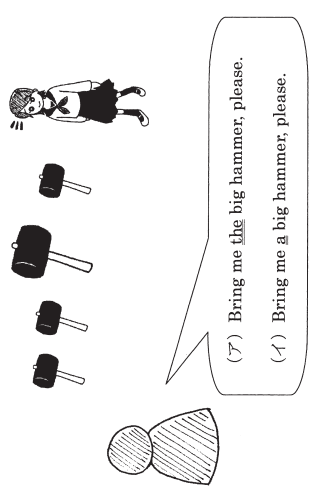
C E M S E E

We 冠詞!

~あなたの言いたいこと、相手にちゃんと伝わってる?~



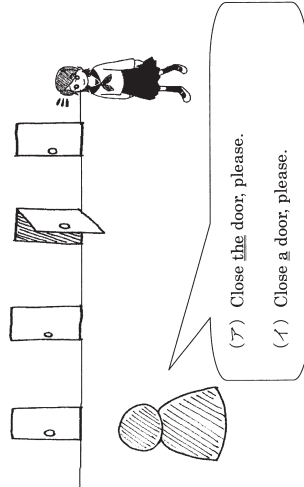
《問題2》
下の絵を見てください。
「大きなハンマーを揃ってきてください」と英語で頼むとき、何と言えはよいでしょうか。(ア)と(イ)のどちらかを選び、その理由を書きなさい。



答え ()
理由

2

《問題3》
下の絵を見てください。
「ドアを閉めてください」と英語で頼むとき、何と言えはよいでしょうか。(ア)と(イ)のどちらかを選び、その理由を書きなさい。



答え ()
理由

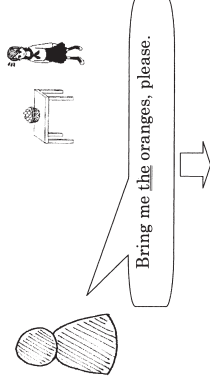
3

2、名詞が複数形の時

《問題4》

下の2枚の絵を見てください。①の絵の状況で次のように言うと、まさみちゃんは②のように行動しました。

①



②



このとき、the が表していることを説明しなさい。

5

これさえ見れば the と a の使い分けはバッチリ！！

「どれのことを言おうとしているのか
相手はわかる」と

思う

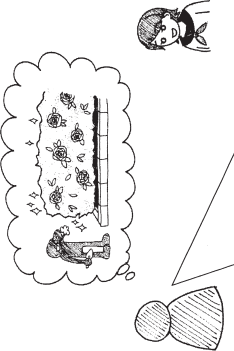
思わない

the

a

4

《問題5》
 「昨日、庭にバラを植えたんだ。」と言うとき、なんと言えはよいでしょうか。()の中に最も適切な表現を入れ、その理由を書きなさい。



I planted () roses in the garden yesterday.

理由:

【問題5：解説】

この問題の状況では、「どのバラのことを言っているかまきまちゃんにはわかる」とは思えません。そのため the を使うことができません。左詞が単数形の場合は a を使用しましたが、ここでは複数形なので a も使うことができません。いったいどうすればよいのでしょうか。

答え：some

some
 いくつなのかは言わない／言えないけど、少し(少なくとも2つ)はある。

この問題では「バラを植えた」とだけ言っており、その植えたバラの本数に関しては何も言っていません。多いのか、少ないのかもはっきりと言っていないという状況です。そんなときに便利なのが some という表現です。このときの some は、「x個」と弱く発音されます。

() は、「どれくらいか/いくつか」という、具体的な本数を意識せずに使うことができる表現です。バラを〇〇本植えたんだ」というようにははっきりとした数ではなく、「少なくとも2本以上のバラを植えたのは誰かなんだけれど、いくつ植えたのかまでは言わなくてもいいなあ……」とか「いくつあるかはわからないんだけど、多くはないんだよなあ……2つ以上あるは確かんだけど……」というときに使うことができます。数を示す表現は多数あります。たとえば many や a lot of は数が「多い」という意味を持ち、a few など は数が「少ない」という意味を持っています。しかしこの問題では、植えたバラの本数が「多い」とも「少ない」とも言っていないので、これらの表現を使うことはできません。したがって、最も適切な表現は () であると言えます。

～数を示す表現のイメージ～

少ない ← a few some a lot of → 多い
 many

数か種類か

次の原文を比較してみましょう。
 1 : I planted some roses in the garden yesterday. (私は昨日、庭にバラを植えたんだ。)

2 : I like roses. (私はバラが好きです。)

1 で使われている some は、先ほど述べたとおり「少なくとも2本以上のバラを植えたのは確かだけど、いくつ植えたかはわからないや」というように、どのくらいあるかはわからないが、少しはある場合に使います。しかし、2には the, a, some のような冠詞が見当たりません。いったいなぜなのでしょう。

目に見えない冠詞

2は、「私が好きな花は、(チューリップでもタンポポでもなく) バラなんだ!」というように、「種類」について言っている文章です。ここでは、バラの「数」は無関係です。このように「種類」のみを言いたいとき、目に見えない冠詞を使います。一見、冠詞がないように見えますが、実はここには冠詞が存在しているのです。

I like ○ roses.
 「種類」を言いたい⇒「数」は無関係⇒目に見えない冠詞を使う

また、次の例文を見てみましょう。
 3 (a) : I want to see tigers and pandas in the zoo. (私は動物園でトラとパンダを見たいなあ。)

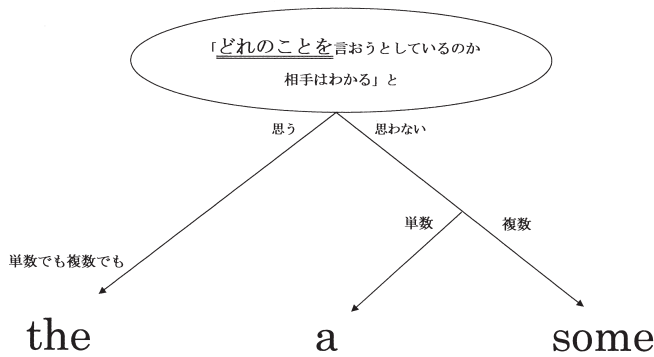
3 (b) : Don't you want to see monkeys, too? (サルも見たいんじゃないの。)

「動物園で见たい動物はトラとパンダ」と言うように、種類のみが問題になっており、トラ〇匹という具体的な数についてのイメージは関係ありませんよね。したがってこの場合も、目に見えない冠詞を、言いたいこと前に入れているのです。(ちなみに、目に見えない冠詞のことを、ゼロ冠詞と呼びます。)

3 (a) : I want to see ○ tigers and ○ pandas in the zoo.

3 (b) : Don't you want to see ○ monkeys, too?

これさえ見れば the と a、some の使い分けはバッチリ!!



このような the、a、some を 冠詞 といいます。

《練習問題1》
 次の英文は、適切ではありません。下線部の冠詞を正しく直して () の中に入れてください。

(1) I was trying to fix the stereo system. But I broke a left speaker.
 (俺は車のステレオを直そうとしたんだ。けど左のスピーカーを壊してしまったよ。)
 ※注: fix: 修理する。

(2) [At a rent-a-car company]
 The salesclerk said for me, "You can use the car."
 [レンタカーショップにて]
 (店員が私に言いました。「車を借ってもいいですよ。」)
 ※注: rent-a-car company: レンタカー会社 / ショップ
 The salesclerk: 店員

《練習問題2》
 次の空欄に、適切な冠詞を入れてください。(※ゼロ冠詞の場合は、×を入れてください。)

(1) I met _____ famous actors in Hollywood.
 (私はハリウッドで有名な俳優に会いました。)

(2) I hate _____ onions.
 (私はタマネギが嫌いです。)

(3) _____ books are always welcome presents.
 (本は、つねに、喜ばれるプレゼントです。)

(4) I bought _____ pencil.
 (私は鉛筆を買いました。)

(5) _____ tail of this cat is black.
 (この猫のしっぽは黒い。)

